

聖書箇所：マルコによる福音書4：35－41

- 35 さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」といわれた。(36) そこで弟子たちは、群集をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについていった。
- 37 すると、はげしい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。
- 38 ところがイエスだけは、ともものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」
- 39 イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。(40) イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」(41) 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういうかたなのだろう。」

メッセージ骨子：

<序論> ガリラヤの海は、対岸が見えないほどの大きな湖でした。したがって夕方から、船で向こう岸に向かうといのは、途中で日が暮れて真っ暗になる可能性もあり、不安かつ、危険のともなう行為でした。それでも、イエス様は弟子たちに『向こう岸へ渡ろう。』といわれます。弟子たちがそこで経験したこと、主がそれを通して示そうとされたこととは何だったのでしょうか。

<ポイント1> 「語られた今があなたのとき」

モーセが出エジプトの命を主から受けたのは、彼が80歳のときでした。彼は高齢や口下手などを理由に辞退しようとするが、「今行け。」「わたしはあなたと共にいる。」「わたしがあなたを遣わすのだ。」(出エジプト3：10, 12)と語られ、最後は神の命に従い、人類史上最大の偉業を成し遂げ、120歳で天に帰ります。何か新しいことを始めようとする時、不安は山積しているものです。若者なら経験不足、高齢になると体力や気力に不安を感じ、躊躇するものです。しかし主は言われます。「目の前にあるのは不安の海だけど、一緒に行こう。今があなたの時だから。」と。私は今人生の夕方4時ですが、主の語りかけを受けて立ち上がりましたが、同じくあなたにも、主は語りかけておられるのではないのでしょうか。もしそうだとしたら、今があなたの時、**best timing** だということです。

<ポイント2> 「嵐には遭うが、そこにイエス様も居られる」

イエス様に従ったら、すべてが順風満帆、波風一切なしというわけではありません。クリスチャンとノンクリスチャンと同じく風邪も引くし失敗もする。人間関係で苦労することもしばしばです。逆にクリスチャンゆえに背負い込む苦労だってある。イエス様は、「わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」(ヨハネ14：27)といっていますが、この平安は、嵐が来ないことではなく、嵐が来てもなくならない平安です。雨が降って、風が吹いても、イエス様と **same boat**。手がつながっているから、ずぶぬれになっても体温がある。必要なときには水からも引っ張り出してもらえ。この父親的な安心を、主は「わたしの平安」といっておられるのではないのでしょうか。

<ポイント3> 「ついて行くべきはこの方だと知る」

長い間イエス様と一緒に寝起きを共にしてきた弟子たちでさえ、主の本質を知ることなくやってきました。元漁師、元船乗り、海のプロというプライドは、大嵐でたたきぶされ、かつ目の前で嵐を鎮めるイエス様を見て、「この方さえ見ていればいいのだ」と気づきます。わたしたちには、すぐ近くに恵みがあっても、気がつかないことがあります。逆に一見試練に見えることが、実は恵みに気づくチャンス、真の幸せのスタートとなることが多いのです。たとえ試練が来ても、その試練を経て、「この方」を発見できたとしたら、それはあなたにとって、生涯の宝を探し当てたことになるのです。

<まとめ> イエス様は、まずご自身が、わたしたちの人生の荒波、不安の海をともに渡るため、そして最後の天国への船旅にも同行するために、天からひとり渡ってこられました。そして「向こう岸へ渡ろう」「ほら、わたしの手をとって」と両手を広げて、あなたが進み出るのを待っておられます。今イエス様のみ腕に飛び込もうじゃありませんか。そして、ライアンのような人生一人旅、不安と孤独の航海とは、今日を限りにさようならをしようじゃありませんか。今は恵みのとき、今は救いの日です。

「神は、実に、そのひとり子をおあたえになったほどに、世を愛された。それは御子を信じるものが、一人として滅びることなく、永遠の命を持つためである。」(ヨハネ3：16) 以上